

在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第6回

株式会社ファーマシイ 山根暁子



今日、年中営業の小売店は珍しいものではなくなった。筆頭はもちろんコンビニエンスストアだが、お盆や正月にやれやれ、やっと休める、と家族と出かけると喫茶店や本屋、服屋、どこも普通に営業している。元旦から行列ができているケーキ屋さんの前を歩いてふと、薬の必要度はケーキより上か下か、カレンダーどおりで営業している薬局は地域住民のニーズを満たしているのか考えた。そのときいっしょだった母親は、普段、親不孝をしているうえにまだ家を空ける気かと、「薬局が正月に開いている必要はない！」と一刀両断だった。母親の言葉には、二方向からの現実が感じられる。ひとつは、旧体制から変化しようとしている薬局従業員のワーク・ライフ・バランスのいびつさ、そのしわ寄せを食っている家族の不満。もうひとつは、保険薬局の多くが処方せん処理以上の機能を地域住民に認識されていないという事実。

私のまわりの多くの薬局薬剤師は、本来の業務時間を超えて仕事をしている。私たちは口をそろえて「仕事をがんばっている」と言う。しかし、薬剤師ではない人間に、それは伝わっていない。患者さんにも地域住民にも医療者にも、薬局薬剤師の業務のリアルイメージは持ってもらえていない。私たちの「がんばり」のベクトルは薬剤師の自己満足、ひとりよがりなのかもしれないという不安が心をよぎる。

2014年度の報酬改定では薬局の24時間体制について言及された。来るべき超高齢多死の日本で、在宅療養の受け皿強化を考えれば、避けては通れない体制だと思う。ただ、自分にできるかを考えるとひとりでは難しい。仲間がいなければ実現は難しい。

私の勤める「さんて薬局」は、2010年から「医療用麻薬を24時間365日患者に届けられる体制」を掲げ、24時間の応需体制をつくっている。仲間たちに支えられて成り立っている体制だ。連休の間や夜間の緊急対応などがないように、日ごろの計画訪問で担当薬剤師がマネジメントをしている（つもりだ）が、それでも緊急対応が発生しない月はほとんどない。

患者さんや、あるいはご遺族と話していてよく聞くのが「休みの日に来てくれて助かった」という感謝の言葉だ。必要なときにきちんと必要なサービスを提供できる体制がある、というのは医学的な専門知識を持たない人にとってもわかりやすい付加機能なのだろう。

これから家で療養する人は増え、全体の増加に比例して医療度の高い人の在宅療養も増える。24時間体制は、近い未来に薬局に必要とされる機能のほんの一部ではあるが、明日からそれが可能な保険薬局はとても少ない。保険薬局が国民に必要とされる存在であるために、私たちは大急ぎでたくさんの課題を解決しなければならない。